

## 第4章 教育学部附属光小学校自転車置き場設置に伴う試掘調査

### 1 調査に至る経過

山口県光市大字室積浦1-1に所在する山口大学教育学部附属光小・中学校構内において自転車置き場が新営されることとなった。工事自体の掘削深度は約30cmと比較的浅いものであったが、構内には周知の遺跡として「御手洗遺跡」があり、埋蔵文化財に対する行政上の手続きを必要とした。昭和40年に附属中学校体育館新営工事中において遺物包含層が確認されているが、その後全く調査が行なわれておらず、今回の工事地点を含め構内全体の包含層の広がり把握されていないこと、また体育館地点の包含層最上限が地表下17cmであり、場所によっては非常に浅いところから検出される可能性も指摘できるなどから、本工事中に際して遺物包含層にかかった場合、文化財保護法のもと工事中断の事態も考えられるため、万一にも工事に支障を来さないための配慮を加え、関係当局と協議の結果、工事着工前に埋蔵文化財包蔵有無の確認調査を行なうことを決定した。

調査は昭和59年2月20日に実施した。方法は工事範囲（Fig.48斜線部分）内の3カ所に試掘坑を設定し、一部機械を用いて掘削した。調査総面積約50㎡。

（森 田）

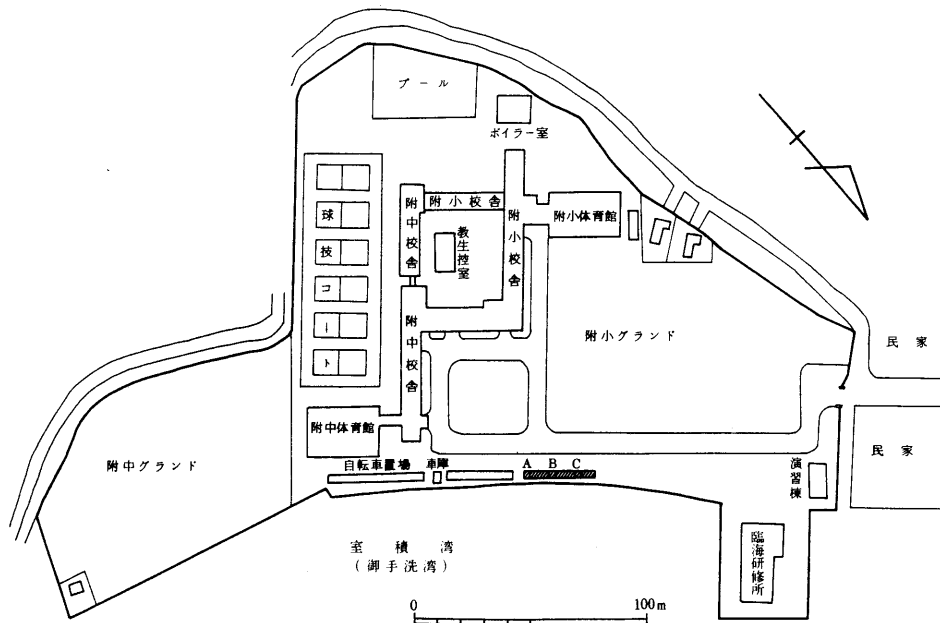


Fig.48 調査区位置図

2 位置と環境 — 室積の歴史の変遷を中心に —

御手洗遺跡は、山口県光市室積に所在する山口大学教育学部附属光小・中学校の構内とその周辺に広がる縄文時代から中世にかけての遺跡である。遺跡の所在する光市は山口県の東南部、島田川下流域を中心とした地域にあり、室積は島田川河口より南方、周防灘に面した海岸沿いに位置する。室積周辺は海岸部に内陸から小起伏山地である千坊山地が迫っているため低地は狭隘であり、わずかに千坊山・大峰山南麓裾部で小規模な扇状地を形成している。戸仲から室積に至る海岸には、島田川の土砂運搬作用によって砂浜が発達し、現在室積の市街地の大部分はもと島であった峨嵋山（別名 普賢山）との間に形成された陸繋砂洲上に立地する。御手洗遺跡は室積半島峨嵋山の北縁海岸部に存在し、眼下には内湾の室積湾（御手洗湾）が広がっている。なお、この地は典型的な陸繋島地形として全国的に著名であり、その景観とくに先端部の砂嘴である象鼻岬は「周防天の橋立て」と言われるなど風光明媚の地として古くより知られ、現在瀬戸内海国立公園の一部をなしている。

以下、御手洗遺跡をとりまく歴史的環境についてみると、まず「室積」という地名の由来は、江戸時代に編修された地誌『防長風土注進案』に「当村の儀は無漏津・室津海、又

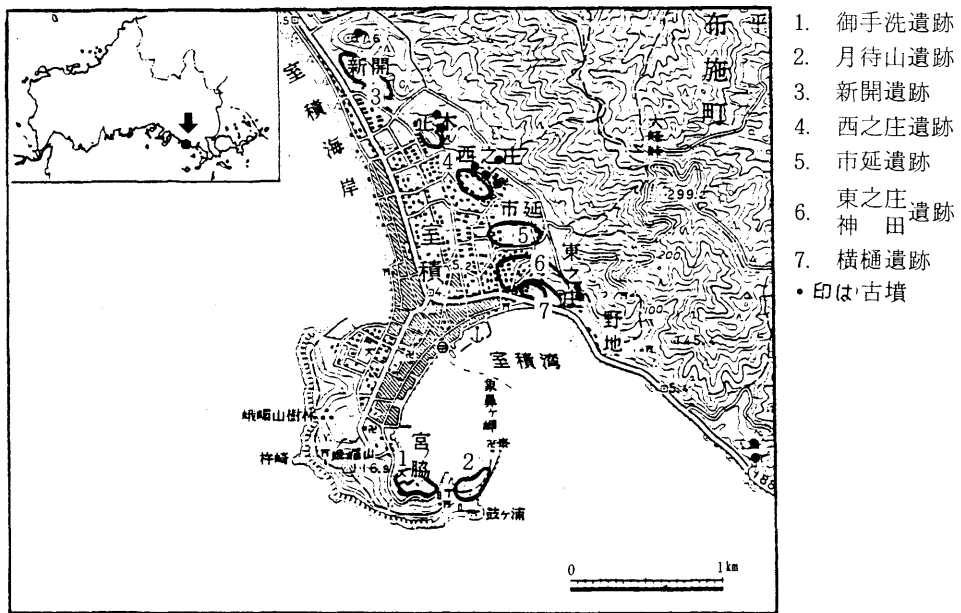


Fig.49 周辺地形図および遺跡分布図

## 位置と環境

は室積・室津見とも書来り候由、中古よりもっぱら室積の字相用い候。むろつみといふ事の説も相見えず候えども、周防洋中、当港のみ八方の風を防ぎ、船かかりよろしく、誠に室の内に住むに同じきとの諺にて、いつとなく室住と唱え来り申候由申伝え候。また或説に伝、館の字、古訓ムロスミと相見へ候えば、当港往昔より繫泊の場所に御座候えば、外国聘使などのために館舎設け置かれたれば、自然と地名に相成候やとの申伝へも御座候」とあり、この両説ともその真偽は定かではないが、室積湾が良好な港として古くより使用されていたことに関連している。

室積の地域で人々が営みをはじめた時期は、今のところ縄文時代後期まで遡ることができ<sup>2)</sup>。東之庄にある横樋遺跡<sup>2)</sup>がこれに相当する遺跡で、室積湾北岸近くの扇状地上に立地する。昭和40年に遺物包含層が確認され、それに伴い縄文土器・石器・植物遺体などが出土しており、石器類の中に漁具である石錘が多数あることから、当時より前面の海域で漁労を行っていたことが察せられる。その他縄文時代の遺跡としては東之庄・神田<sup>3)</sup>で石棒が発見されている。また東之庄とは室積湾を挟んで対峙する位置にある御手洗遺跡からも晩期に比定される土器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、御手洗遺跡がある。この遺跡の詳細は第3節で記するが、弥生時代前期から後期までの各時期の土器が出土している。また東之庄や市延でも弥生時代の石斧が採集されているが、山麓裾部では今のところ集落跡と推定される遺跡が見つかっていない。なお、弥生時代は大陸から稲作技術が伝播し、一般に人々は各地に定住し生活を営むようになり、生産力向上とともにそのフィールドを拡大していくが、この地にあつては大きな集団を形成するまでには至らなかったと察する。あくまでも推測の域を出ないが、それは当時の農耕が湿田経営であつて、本地での低地の多くは海成砂層のためそれに適した土地の確保が難しかったと思われるため、わずかに山裾縁辺部で農地を開発し、かつこの海域を利用した小規模な半農半漁を行なう程度の集団が存在したと思われる。

しかし、古墳時代になると遺跡の数は急増してくる。その多くは千坊山西南麓傾斜変遷線付近の標高10～40mに立地するもので、北から新開遺跡、西之庄遺跡、西延遺跡、東之庄・神田遺跡<sup>5)</sup>などが連続する。また御手洗遺跡でもこの時代の遺物が多く出土する。いずれの遺跡もこれまで正式な調査がなされていないので詳細は明らかでないが、今日まで数多くの遺物が採集されており、この時代より本格的に村落が形成され、地域的展開が活発化した様相を示している。その要因を考えると、これまで上記の理由で多くの人々をうけ入れるには生産基盤が不十分であつたと思われるが、古墳時代中期以降に至って農耕技術

に大きな画期、すなわち乾田の開発が進展することによって生産力の増加を可能にしたことも一つとして上げられると考える。また、これら集団の存在を裏づける墳墓もある。その多くは集落跡と推定されるそれぞれの遺跡付近に造営されており、その立地は概して遺跡より高い地点、標高50～60 m前後に多数点在する。新開には金山古墳、西之庄には蓬萊山古墳、げんべい山古墳、西御意古墳群、御ヶ迫古墳群、東之庄には人見田古墳、東之庄古墳<sup>6)</sup>などがある。これらの古墳は横穴式石室をもつ後期の小円墳がほとんどであるが、東之庄古墳だけは主体部が箱式石棺で中期に遡るものである。またこの中でげんべい山古墳は飾大刀・鏡・銅鏡など優品が副葬されていたことでとくに著名である。なお、この時代はヤマト政権の全国支配体制形成過程の中において地方の在地有力首長層を基盤に国造制が成立しているが、熊毛・玖珂二郡にまたがる広い地域では「周芳国造」が存在しており、室積の地もその統治下に包括されたと察する。

奈良時代に至ると、室積湾を俯瞰し周防灘を広く眺望できる東之庄呉町の地に、県内では数少ない古代の寺院が建立されていたと推定されており<sup>8)</sup>、これまで多量の瓦が出土している。昭和58年度に山口大学人文学部考古学研究室によって発掘調査が実施され、直接寺院に関するものは現在検討中であるが平安時代前半までにおさまる時期の溝状遺構も検出されている。また以前採集の瓦の中に白鳳時代の軒丸瓦が含まれており、創建時期を考える上で問題を提起している。さらに平安時代初め頃には、空海（弘法大師）が西千坊山に妙相寺を、最澄（伝教大師）が東千坊山に相意寺を興したと伝えられており、古くはこの地域周辺における伝教の拠点になっていたと思われる。

また、律令時代には各地に郷里制をひいているが、この地は『和名類聚抄』に挙げている周防七郷の内、「多仁郷」が室積付近に当てはまる説がある<sup>12)</sup>。

平安時代から中世にかけては、この地に石清水八幡宮宝塔院領の荘園がおかれ「室積荘」と称した<sup>13)</sup>。15世紀以降に大内氏台頭とともに武家領に移行するが、山城国石清水八幡宮の社領の場合とくに10世紀以後隆盛することや室積庄の地名が石清水文書の中で承安元年（1171年）のものに記述があることなどから、比較的長い間宮寺領として存続していたと察する。今の東之庄や西之庄などの地名も荘園時代の名残りであろう。

なお、室積湾（御手洗湾）の港としての歴史的変遷を若干述べると、地理的に良港であることはいうまでもなく、湾の周辺に遺跡が縄文時代後期より連綿していることから、かなり古くから港として使用されていたことが窺われ、『万葉集』巻15に記されている天平八年（736年）の遣新羅阿倍朝臣麻呂一行の航路の一停泊地と「熊毛浦」と称する地がこ

## 位置と環境

の室積であるとも比定<sup>16)</sup>されている。平安時代になるが、古文書<sup>17)</sup>で大同元年（806年）に僧空海が帰朝の際、この港に寄っていることが記され、また、『防長風土注進案』で伝えるところ治承元年（1177年）には京都東山で鹿ヶ谷事件を起こした平康頼の乗船<sup>18)</sup>が寄航し、さらに『散木奇歌集』から源俊頼もこの港<sup>19)</sup>に来ているなど、古くより官船の停港地にも定められていたことが予想される。さらに、平安時代末期応保・長寛年間（1160年代）の成立といわれる『本朝無題詩』には、詩人釈蓮禅と藤原周光の乗った船がこの地に泊り、その時に両人は室積の様子を詩にしており、それによれば当時すでに漁村としても栄えていたことが知り得る<sup>20)</sup>。

中世に至ると倭寇が横行するようになるが、室積周辺地域も例外ではなく『老松堂日本行録』によれば、応永二十七年（1420年）に朝鮮国王世宗の使として来日した宋希環<sup>21)</sup>が無隠頭美島（室積）に寄港した際に「海辺居人賊徒故」と言っており、当時においてこの地が海賊の根拠地であったことがわかる。また『満濟准后日記』では永享六年（1434年）に渡唐船の警固を「周防・伊予辺海賊」<sup>22)</sup>に命じていることから、これら海賊は大内氏の警固衆として活躍したかもしれない。

さらに江戸時代には、幕藩体制の確立とともにこの室積港は熊毛宰判の管轄に属し、萩本藩の保護をうけて整備され、周南地方の主要商港として繁栄する。元禄十四年（1701年）に室積浦の一百姓が「港内の見入りよろしく、夜中にも回船が出入できるようにしたい」という目的で、象鼻岬に自費による燈籠堂の建設を願い出て許可されており、元禄頃には港が諸国回船の出入で賑わっていた様子<sup>23)</sup>が察せられる。享保十四年（1729年）には「室積御番所」が設置され、自他藩の御用船や、朝鮮来信使船などの諸用を取り扱う海上御勤方が確定し、藩港としての重要性を高め、また安永年間までに越荷事業<sup>24)</sup>を行なう会所が置かれて、<sup>25)</sup>主に防長米の積み出し港として栄える。享保末から宝暦年間にかけて一時衰微したものの、その後藩政改革の一環として整備され、また近接地で塩田の開発なども行なって、再び港町の繁栄を呼びもどし、藩末期には薩長交易港にもなっており、防長では三田尻港と共に藩の重要な役割も担っていた。

この時代においては漁港としても栄えており、寛永検地の際に調べられた浦屋敷数<sup>26)</sup>は102屋敷で防長での平均を大きく上回っている。また藩の特別免許を得た御用浦、立浦（本浦）でもあった。

以後、明治に至ると長距離定期船の寄港地としても選定<sup>27)</sup>されていたが、明治20年代終り頃<sup>28)</sup>から交通事情の変化により、港の重要性は漸次的に上関港に移り、室積港は斜陽の傾向

教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査

<sup>29)</sup>を辿ることになり、現在は近海漁業の基地として地方一般的な漁村化を呈している。

(森 田)

〔注〕

- 1) 山口県文書館『防長風土注進案』（山口県立図書館、1963年）。
- 2) 福本幸夫『先原史時代の光市』（1966年）。
- 3) 山口大学島田川遺跡学術調査団『島田川』（1953年）。
- 4) 注3)に同じ。
- 5) 注2)に同じ。
- 6) 注2)に同じ。
- 7) 弘津史文『周防国熊毛郡上代遺跡発見地調査報告書』（1977年）。
- 8) 注3)に同じ。
- 9) 山口大学人文学部考古学研究室御教示。
- 10) 中野孝之「山口県出土の古瓦」（『山口県地方史研究』1975年）。
- 11) 福本幸夫『郷土史散歩』（光地方史研究会、1958年）。  
中道静夫『室積郷土史説』（1981年）。
- 12) 当郷域については、光市室積・光井地区と田布施町周辺にあてる二説がある。  
『防長地名淵鑑』には「今多仁郷を前記各村とすれば、波濃郷過小となりて成立せず、波濃郷は必ず今の田布施の地域に互り、田布施川貫流の地とせざる可らず」といって、光市のうち室積及び光井村を多仁郷の古郷域にあてている。また、布引敏雄氏は多仁郷の比定地を『光市史』の中で源頼朝書状（尊経閣・東福寺文書）より、田布施町周辺を有力視している。いずれにしても現時点明確でない。
- 13) 布引敏雄「古代・中世のひかり」（『光市史』、1975年）。
- 14) 藤井一二「大寺社領の成立と分布」（『日本歴史地図』原始・古代編（下）、1982年）。
- 15) 山口県文書館「石清水文書」（『山口県史料 古代編』、1973年）。
- 16) 柴原永遠男「海路と舟運」（『古代の地方史』第2巻、1977年）。木下 良「国郡区の編成と主要施設・交通」（『日本歴史地図』原始・古代編（下）、1982年）。
- 17) 注1)に同じ。
- 18) 注13)に同じ。
- 19) 注13)に同じ。
- 20) 小川国治「近世のひかり」（『光市史』、1975年）。および山口県文書館『山口県史料 古代編』（1973年）。
- 21) 山口県文書館「老松堂日本行録」（『山口県史料 中世編上』、1979年）。
- 22) 山口県文書館「満濟准后日記」（『山口県史料 中世編上』、1979年）。および 注14)に同じ。
- 23) 注13)に同じ。
- 24) 寄港する他国の廻船に対し、藩内諸郡から廻送された防長米を販売することを主たる業務とし、積荷の保管や融資なども行なうものである。当時、下関や中ノ関でも同様のことが行なわれていた。
- 25) 小川国治「近世のひかり」（『光市史』、1975年）。
- 26) 石原啓司「海の産物」（『防長産業の歩み』、山口県教育委員会、1981年）によると防長両国で浦屋敷が存在する村は49カ村で、屋敷総数は2900を数える。一村平均（屋敷数／村数）は約59である。
- 27) 中道静夫「近代のひかり（村政の推移室積）」（『光市史』、1975年）。
- 28) 山陽路線から外れたことや船舶の大型化などの要因による。
- 29) 昭和20年での室積港へ入港する日本型船・西洋型風帆船の数は、上関港を上回っていたが、以後逆転し昭和29年には顕著な差が表われる。

### 3 「<sup>みたらい</sup>御手洗遺跡」の既往調査について

山口大学教育学部附属光小・中学校の構内に周知する「御手洗遺跡」の発見は、同校の前身である山口県女子師範学校当時の昭和7年において、グラウンドの東南隅から弥生時代のもと考えられる太型蛤刃石斧が表採されたことにはじまり、昭和10年までに弥生土器<sup>1)</sup>も採集され、<sup>2)</sup>当地に古代の遺物が散布していることが明らかになった。

戦後に至って同校が山口大学山口師範学校光附属小・中学校の名称で開設していた昭和25年、同校に赴任していた小野忠熙氏（元山口大学教育学部教授）によって構内の面する海岸線で土師器の散布が認められ、これを契機として翌年にわたり半島部分の踏査が行なわれた。<sup>3)</sup>その結果は土器類が峨嵋山の東北麓に位置する標高20m程の通称月待山付近を中心として、西は附属小学校付近から、東は象鼻岬の鈎状砂嘴の中央部までの間に分布していることが判明し、月待山の平坦面付近と象鼻岬の中央部では遺物包含層も確認された。この昭和25・26年の踏査結果から遺物の散布が附属構内およびその付近のみならず、象鼻岬までの広い範囲に及んでいることから、その後構内の地域も「月待山遺跡」として包括され扱われる。<sup>4)</sup>但し、詳細は後述するが昭和40年に構内で遺物包含層を確認し、多くの遺物が伴出されたことにおよんで、当地と月待山付近では遺物の時期が異なることが明確になり、<sup>5)</sup>現在は構内およびその付近に限っては「御手洗遺跡」と称して区別している。

構内に遺跡が埋存していることが明白になったのは昭和40年11月のことで、附属中学校体育館新営工事中に際し、同校教諭増本忠一・福本幸夫両氏等によって同敷地内より遺物包含層が確認され、それに伴って多量の土器類が出土したことによるもので、その調査の概要は『先原史時代の光市』の中に記述されている。<sup>6)</sup>それによるとこの調査は、偶然工事中に遺物を発見したのが切っ掛けで行なわれたもので、工事途中のため十分な調査時間はなく、かつ調査の時点で既に工事基盤までの掘削が終了段階であったため、土層壁面による遺物包含層の確認とそれからの遺物採集に重点がおかれていた様子である。

遺物包含層について考えてみると、まず報告者である福本氏は筆書の中で「少なくとも今回の調査の範囲においていえることは、附中体育館敷地約600㎡の範囲からは多量の土器を出土しており、遺物包含層があること。さらにその包含状態は海岸に近い北東部が濃密であること。基礎工事のためトレンチ式の地面掘り下げが、発見当時はすでに掘り下げ終了時であったため、土器の出土状況は明らかでないけれども、各時期の文化遺物が混在していたと思われるようである。この遺跡のある附属光中学校のグラウンドは、そのGLが御手洗湾の大汐時における最高潮位から164cmという低地である。基礎工事のための掘り

下げは、このGLから150cmまでであった。遺物包含層上限は、グラウンドGL下17cmから110cmの傾斜を東から西にむかってもっており、平均して75cmである。その下限（包含層の厚さ約50cm）は67～160cmである。包含層は峨嵋山麓（グラウンドの南側）から海岸に向けて、さらに月待山側（グラウンドの東側）から西の校舎側に向けて、それぞれ傾斜しているが、その厚さは概して同じ約50cmである。包含層は黒褐色の海成砂礫層である。なお、包含層の上下共に海成の砂礫層であるが色が黄茶褐色・黄褐色・褐色等の層をなしているので、包含層との区別は明瞭であった。グラウンドの埋文の土層は10～30cmの薄いものであった。」と以上のように述べている。このことから察すると、この調査ではGLから1.5m前後の深さまでの土層が調べられており、その深度内では本来の地山面は検出されていないが、その間いくつかの層をなす厚い海成砂礫の堆積があり、遺物包含層もその一層であることが窺われる。遺物包含層堆積面の旧地形は、調査範囲内において包含層下限の高低差が1m前後あることから、平坦な地形ではなく緩傾斜面状をなし、南東から北西方向すなわち中学校グラウンドから校舎側に向けて下っていると推定される。遺物包含層は黒褐色の海成砂礫層で、旧地形に則し厚さ約50cmと平均した堆積であり、調査区東側でのその上限はGL下17cmと非常に浅い位置にある。なお、この地点でのグラウンドの置土・整地土の厚さは10～30cmで、その直ぐ下には自然堆積とみられる包含層を含む海成の砂礫層であることと上述した土層の堆積状況を勘案すると、中学校グラウンド側の造成の大半は埋め土によるものではなく、一端削平した後整地されたとする蓋然性が大きいと思われる<sup>7)</sup>。したがって包含層の遺存度は調査地点から東側より西側の方が高いと予想される。

包含層から出土したとされる遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器等<sup>8)</sup>である。これらの中で縄文土器を含む若干の遺物は器表が摩耗しているが、大半は破片が多いものの摩耗の度合いが少なく比較的良好な残りである。縄文土器は1点のみで晩期に比定されるものである。弥生土器も出土点数は少量なれど、前期・中期・後期にわたってそれぞれの時期のものがあき、とくに前期の小型の蓋は完形にちかく、外面には貝殻施文によって美しく文様が施されており極めて優品である。土師器は須恵器と共に多数出土しており、中には東之庄遺跡や市延遺跡出土のものと同様のタイプのものがある。須恵器は記載写真や文面から察して一時期に限定されるものではなく、多型式におよんでいると思われる。瓦質土器は数点のみで時期は中世の範疇と推定する。

おわりに報告者は結果として、御手洗遺跡は出土遺物よりかなり長期間にわたる遺跡と考え、包含層に関してはおそらく攪乱堆積であると思われるが、一部漂着堆積も含まれる



### 「御手洗遺跡」の既往調査について

だろうと推定している。なお、その調査は工事中に実施したもので、十分な調査ではなかったものの、御手洗遺跡の状況や時期などを知る上で数多くの手掛かりを与えたと共に、調査対象地が約600㎡と比較的狭く限られた範囲内で、この地域では数少ない弥生時代の遺物を伴出することを含み、縄文時代から中世まで長期にわたる遺物が混在して出土することは稀れで、遺跡の性格等が注目された。また一方で、包含層の広がりや遺構の有無・詳細な土器の出土状況などのあらたな問題も提起されてきた。

その後、今回の調査（昭和58年度）までの期間においては全く調査が行なわれておらず、御手洗遺跡の解明は進展していなかった。

（森 田）

#### 〔注〕

- 1) 小野忠熙「光市室積月待山附近の遺跡」（『島田川』、1953年）。
- 2) 小川五郎「防長石器時代遺物発見地名表」（『防長史6.2』、1935年）。
- 3) 注1)に同じ。
- 4) 注1)の文献においては、構内出土の石器が月待山遺跡出土のものとして記載されている。
- 5) 月待山出土の土器の主体は中世の土師器類である。
- 6) 福本幸夫「御手洗遺跡」（『先原史時代の光史』、1966年）。
- 7) 注6)のP76に記載されている御手洗遺跡の予想包含層限界線の設定とくに東限ラインの推定はこの考えに則するものと思われ、中学校グラウンドの地域ではすでに包含層が削平されている可能性もある。また昭和7年に校庭の東南隅で石斧が表採されたのもこれに起因するのかもしれない。なお、予想包含層限界線の西限ラインの根拠は今のところ知り得ない。
- 8) 遺物は現在附属光小学校に保管されているが、現時点実見していないので、この報告は注6)の文献を参考とする。

#### 4 層位と遺構

##### Aトレンチ (PL.38)

自転車置き場布設予定範囲内の最南端地点に設定した3.5m×3.5mの規模のものである。今回の調査のトレンチ中では昭和40年に古代から中世までの遺物が多量に包含する層を発見した地点に一番近いだけに遺物包含層を検出する可能性が最も高いと予想されたトレンチである。地表面下1.5～1.7mまで掘削した結果、最上部は20～30cmまでは整地土で、以下全て人為的な埋め土であり、地山および古代から中世にかけての遺物包含層は検出されなかった。なお、埋め土内から近世から近代の瓦等が多量に出土した。

##### Bトレンチ

工事範囲内の中央部に設定した3.5m×2.5mのトレンチで、工事基底面である地表面下30cmまで掘削した結果、すべて整地土の範疇内であった。出土遺物は全く無い。

##### Cトレンチ (PL.39(1))

工事範囲内の北寄り地点に設定した3.5m×4.0mのトレンチである。地表面下2.3mまで掘り下げた結果、底面まで近世から近代の土器類を多く含む埋め土であった。なお、南壁で割石積みの石垣状遺構を確認した。この石垣は地表面下約1.5mで上面が検出され、1m以上の高さがあり、さらに海岸部に向かってのびている。

(森 田)

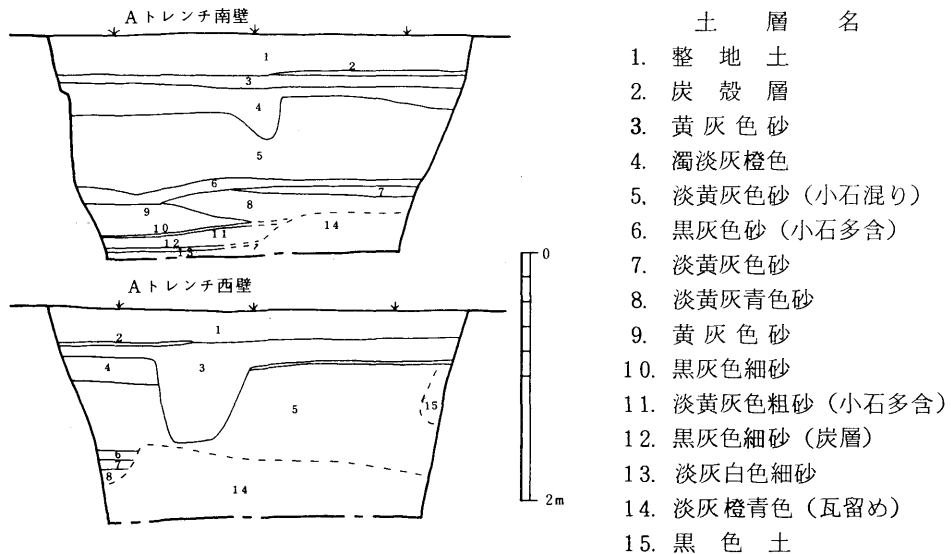


Fig.50 土層断面図

## 5 遺物

## (1) 磁器 (Fig.51 PL.40)

1～6は染付で碗(1～5)と湯呑み(6)がある。1～3・6は有田系のもの。1は暗青色の呉須で外面は上半に「木の葉文」、下半に楕目文帯、内面は口縁直下に六条の圏線を施し、また見込みにも一条有する。胎調は白色、釉調は淡灰白色。2は外面の二条の圏線間に抽象化された「雲間飛鳥文」<sup>1)</sup>を施し、内面は口縁部下に二条、見込み付近に一条の圏線が巡る。呉須は烏および雲が濃青色、圏線が暗青色。胎調、釉調とも白色。3は濃青色の呉須で外面に網目条文様、内面には六条の圏線を施す。胎調、釉調とも白色を呈す。4は外面高台脇に二条の圏線が巡り、また体部には円文を配し、その中に紅葉、山、垣根、菊、蝶等の文様を、その間隙に「福」、「寿」の銘を印刷絵付けする。5は外面に草花文を施すと思われ、口縁部内外面にそれぞれ二条、一条の圏線を巡らす。呉須は花のみ鮮青色で他は青緑色。胎調は橙褐色を呈するが、他品に比べ焼成ともに粗雑である。6は口縁部下と底部に幅広く暗青色の呉須を巡らせ、その間に松葉状の斜格子文を施す。胎調は白色、釉調は淡灰白色。7は碗。外面上半部および内面は灰色の釉で、見込みに目跡が見られる。外面下半部には淡茶色の釉を薄く施す。生地は緻密で灰白色を呈する。

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7

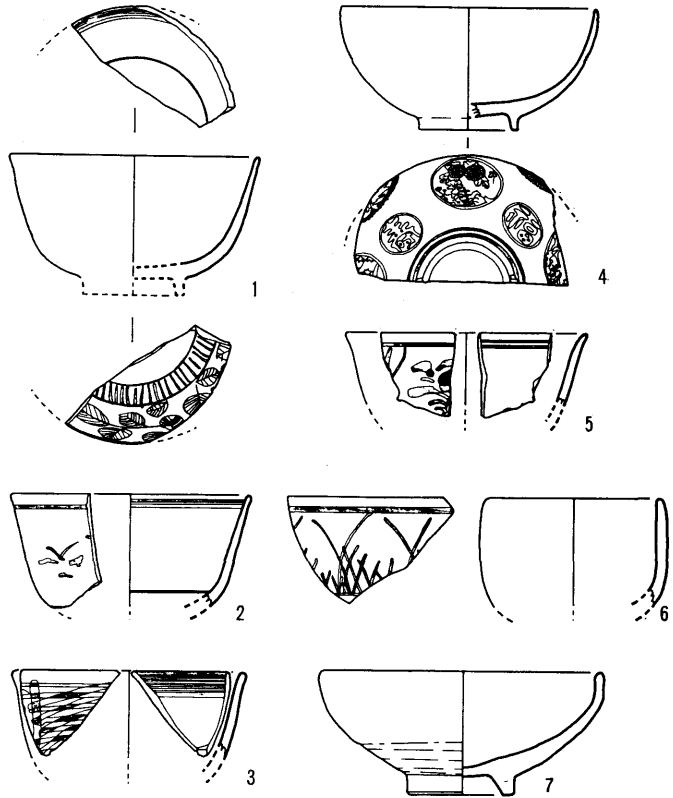


Fig.51 出土遺物(磁器)

## (2) 陶器 (Fig.52, 53,

8～20 PL.40, 41)

甕、鉢、徳利、碗、蓋、  
挿鉢などがある。

8・9は中型の甕で、8  
は上半部を欠失している。

底部外面を除き全面に施釉しており、釉の境に焼成台の痕が残る。胎土は浅黄橙色を呈しやや粗雑。焼成は良好。釉色は赤黒色。9は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部は内外方に拡張して断面「T」字形をなす。端部上面に二条の浅い凹線を巡らす。胴部を巡る十条の沈線の3本目と4本目の間に波状文を施す。内面に叩き目が残る。内外面とも暗赤褐色の釉を施す。胎土は赤褐色

を呈し緻密、焼成は良好。9は石州に器形、文様等、類似品が見られ、石州系統と思われる。<sup>2)</sup>

10~12は鉢。10・11は口縁部が外方に水平近く屈曲し、端部内面をつまみ上げる。両者とも体部外面下半を除いて施釉しており、釉色は10が極暗赤褐色、11が黄白灰色。素地はともに緻密で淡黄色を呈し、焼成も良好。12は大鉢の底部で、高台部分を除きうぐいす色の釉を施す。素地は緻密で明黄灰色を呈す。13は小型の甕。口縁部が直立し、端部は外方へ折れ曲がるもので暗褐色の釉を施す。素地は緻密で赤褐色を呈する。

14は壺。見込み部に蛇の目剥ぎの跡が見られ、畳付部と蛇の目部分を除き、緑茶褐色の釉を施す。素地は緻密で暗紫灰色を呈する。

15・16は蓋。いずれもつま

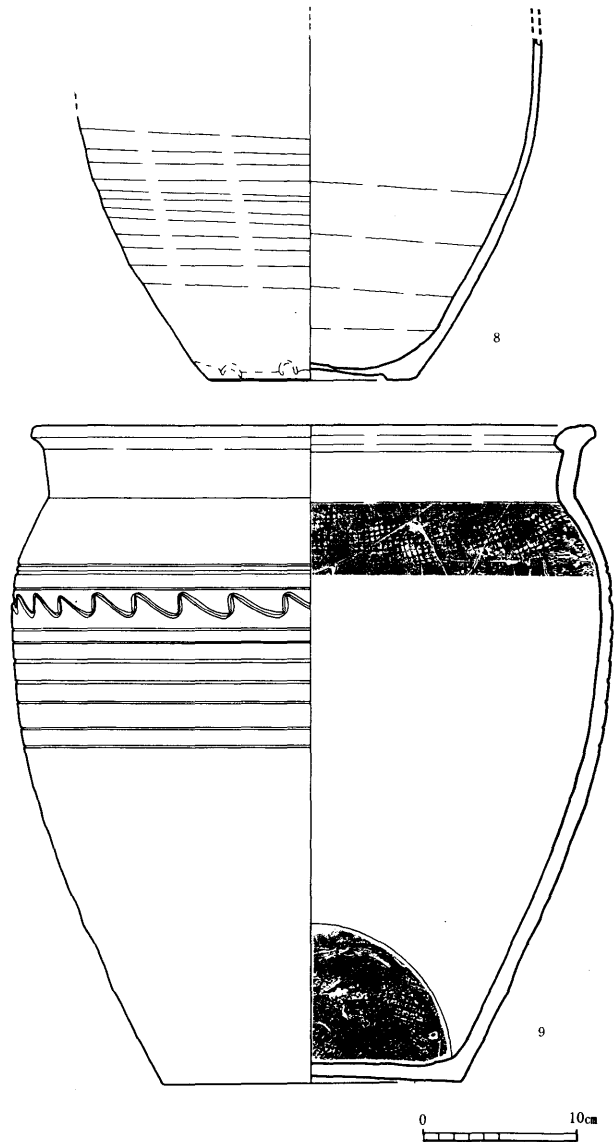


Fig.52 出土遺物（陶器）

遺物

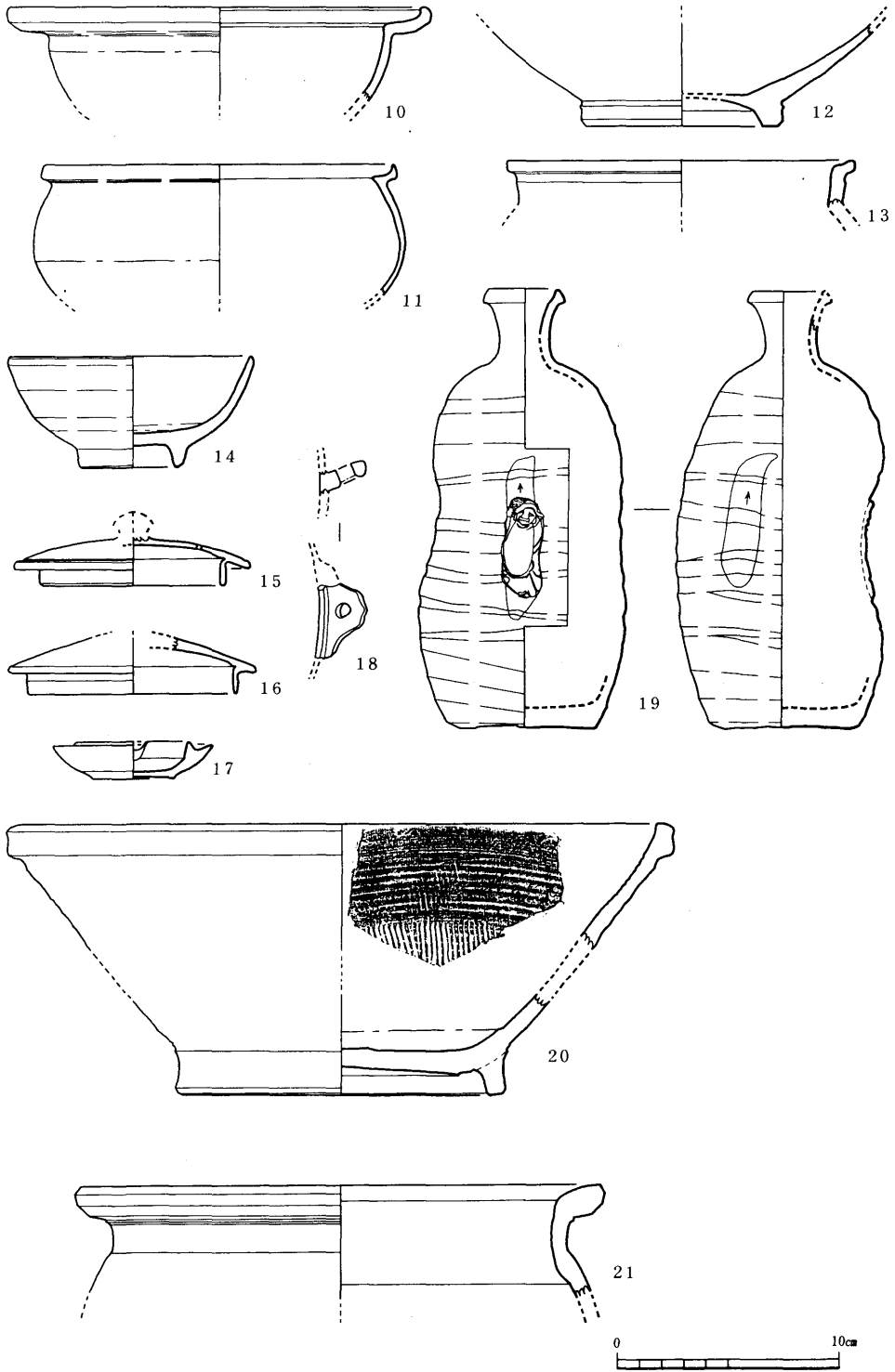


Fig.53 出土遺物(陶器、瓦質土器)

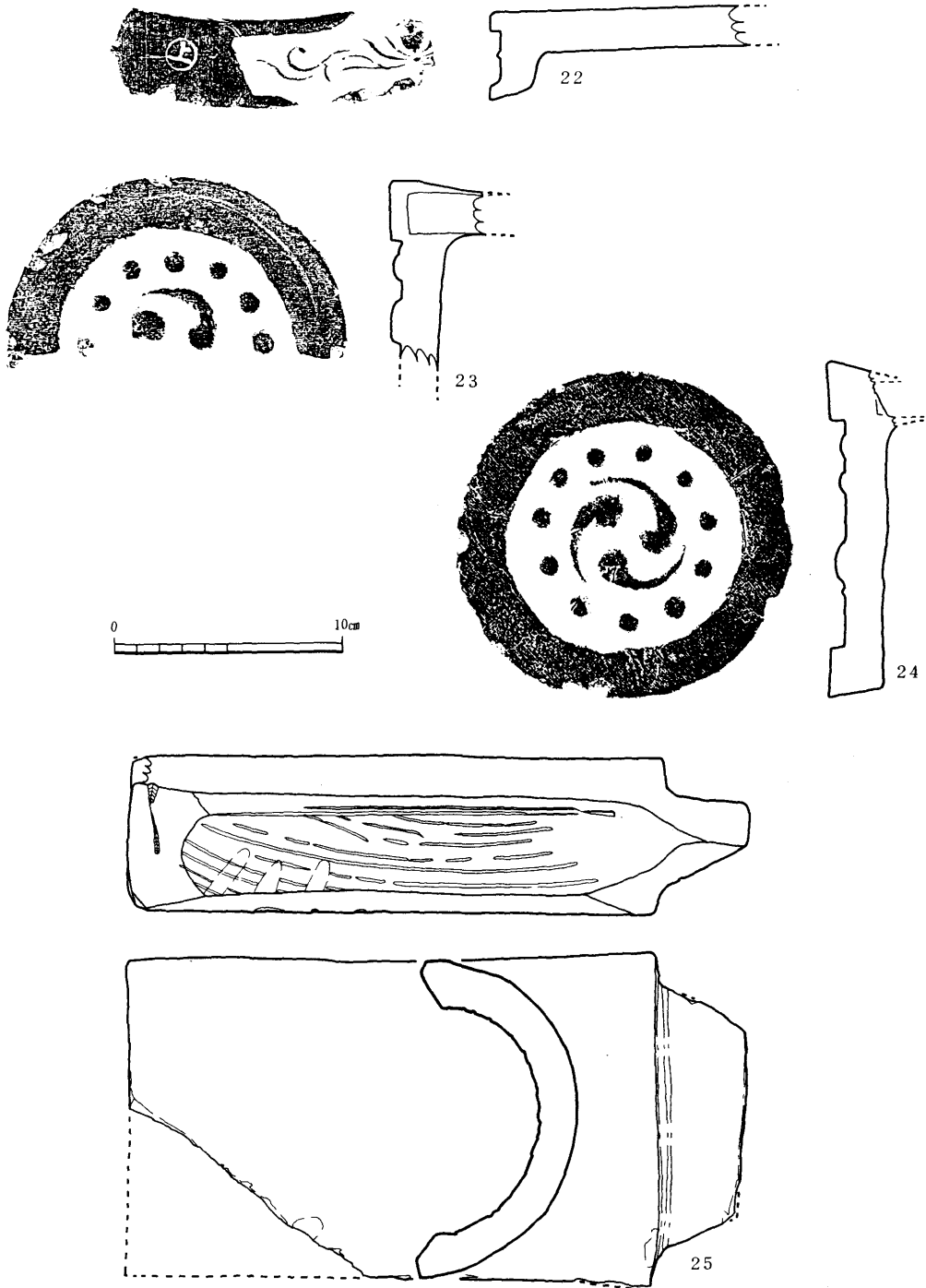


Fig.54 出土遺物（瓦）

## 遺 物

み部分を欠損する。15は天井部中ほどに2個対の穴を穿ち、天井部にのみ透明釉を施す。

16は無釉。素地は共に緻密で15は橙褐色、16は灰黒褐色を呈する。

17は灯明皿。油皿部は短く立ち上がり、一カ所三角形の切り込みを有する。底部は糸切りである。内面に暗赤褐色の釉を施し素地は緻密で橙褐色を呈する。

18は鍋等の耳。素地は黄白灰色で緻密。灰白色の釉を施す。

19は備前系<sup>3)</sup>の人形貼り付け徳利。胴部中位3カ所を指圧により凹ませ、うち1カ所に人形を貼り付ける。素地はやや粗雑で淡褐色を呈し、胴上半部にのみ明茶色の釉を施す。

20は播鉢。体部はやや内彎ぎみに立ち上がり、口縁は玉縁状に肥厚する。高台は底部をカキ目状整形した後に貼り付ける。素地は緻密で赤褐色を呈する。

### (3) 瓦質土器 (Fig.53, 21 PL.40)

小型の甕。短く直立した口縁部は上位で肥厚して上外方へ屈曲する。全体的に丁寧なナデ調整を施しており、口縁部内面に煤附着。暗灰色を呈し、胎土は良好。焼成は堅緻。

### (4) 瓦 (Fig.54 PL.41)

22は軒平瓦の破片で、瓦頭に均整唐草文を有す。胎土は精良で金雲母を含み、焼成は堅緻。23・24は軒丸瓦で右回りの巴文を有す。色調は23が青灰色、24が灰色でともに胎土は精良、焼成は堅緻。25は丸瓦で尻部を一部欠損する。外面は篋削りののちナデ、内面には型の痕跡が残る。胎土は精良で金雲母を含み、焼成は堅緻。色調は灰色。

上述した遺物のうち産地を明確に比定できるものはなく、わずかに9の甕が石州系、19の人形貼り付け徳利が備前系の所産で、全体的に見て近世に属すると思われるが、中には4のように印刷絵付けを行なったものもあり、時期は19世紀に位置づけられよう。

(磯 部)

### [注]

1) 該当する文様が見当たらないため、小稿では「雲間飛鳥文」として扱った。

2) 原宏ほか『日本やきもの集成8 山陰』(平凡社、1981年)。

3) 村上正名ほか『日本やきもの集成9 山陽』(平凡社、1981年)。

桂又三郎『陶磁大系10 備前』(平凡社、1981年)。

備後、鞆で生産される保命酒の容器として生産されたもので江戸時代中期から明治初め頃まで大量に焼かれた。貼付する人形は、大黒天、恵比寿、布袋などが多く、本品では大黒天と思われる人形が貼り付けてある。

## 6 小結

今回の調査では、施工範囲内の3カ所に試掘坑を設定し、一部地表面下約2mまで掘削した。その深度内はいずれの地点も近世以後の埋め土内に留まり、昭和40年に附属中学校体育館の地点で見ついている縄文時代から中世にいたる遺物包含層は確認できなかった。ただし、埋め土内からは近世後半から近代前半にかけての土器や瓦が多量に出土し、また石垣状遺構の一部も検出した。

工事に関しては、施工基盤が地表面下30cmであり、土層の観察からその掘削の大半は整地土内におさまるもので、直接埋蔵文化財に影響が無いと判断した。そのため調査後日、埋蔵文化財運営委員会の承認を得て、工事の着手が行なわれた。

縄文から中世にかけての遺物包含層の未検出については、調査地点が最も海岸よりに位置し、その海岸面との間が大きく段差になっていることから、構内造成においては他地点よりも高く埋め土を施していると推定されるところである。そのため今回の掘削深度よりもさらに下に存在する可能性も指摘できるが、石垣状遺構検出に関連して海岸沿いということの後世の港湾整備のため既に破壊されているとも考えられ、今回の調査だけでは明確な結論づけは早計であろう。

石垣状遺構については、埋め土内の出土遺物から推定して近代初め頃まではその姿は地上に現れていたと思われる、江戸時代中期から明治時代初めにかけて現在の普賢寺前から山口大学附属光小学校の海岸辺りに室積会所の諸施設が置かれ、その役所と波戸は附属小学校海岸敷地内の臨海実験場付近に構築されていたといわれる事柄<sup>1)</sup>に関連するものかもしれない。この推測が当を得ているとすれば、今後の調査如何では文献だけでは明らかにされていない室積会所をはじめとして当時の港湾の様子を具体的に究明できると思われる、また遺物では今回の調査範囲が僅少にもかかわらず19世紀代中心にした土器類が多量に出土することで、当時の商品流通を考える上での一資料として、ひいては、これを契機に近世文献史学と埋蔵文化財調査の結びつけによって、毛利藩の経済経営の一端をより明確に知り得、近世史の研究がさらに進展する可能性も考えられる。

(森 田)

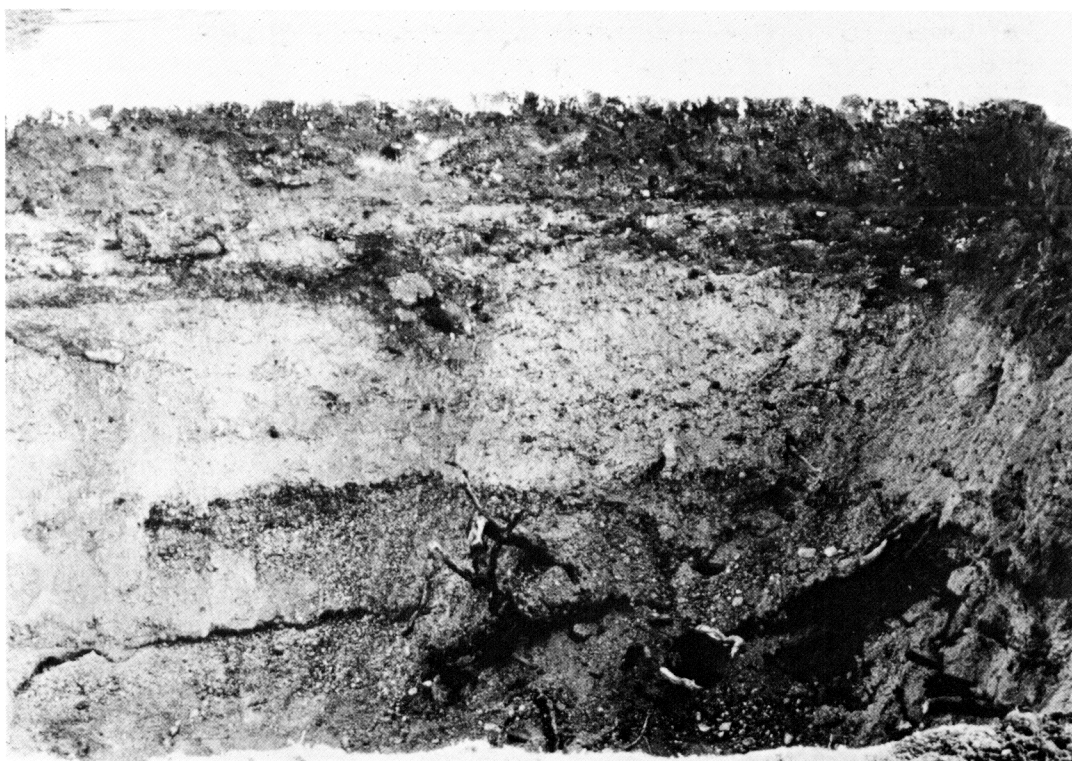
〔注〕

1) 光市教育委員会『光市史』(1975年)。

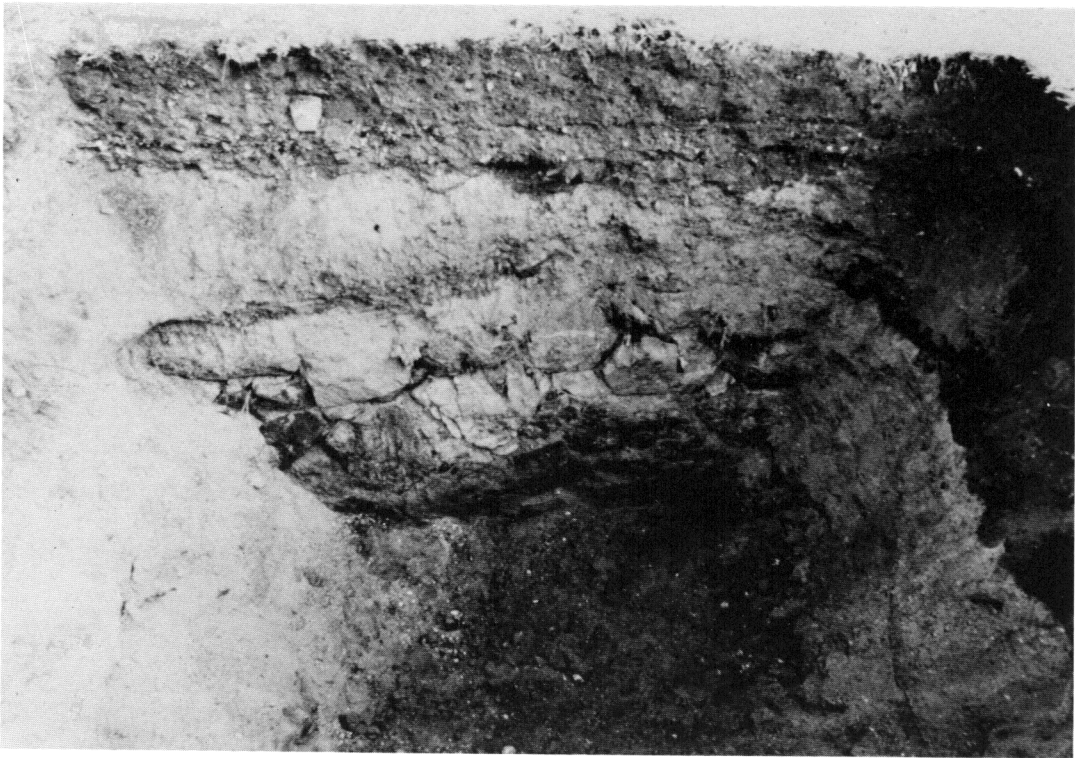




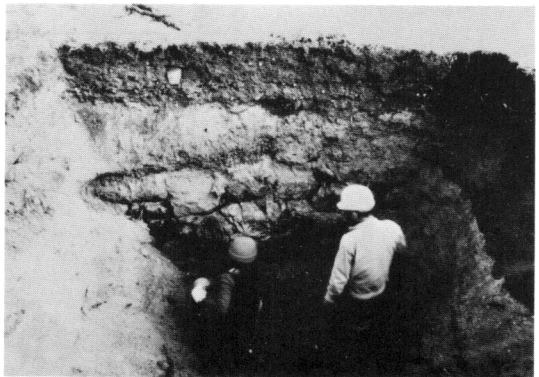
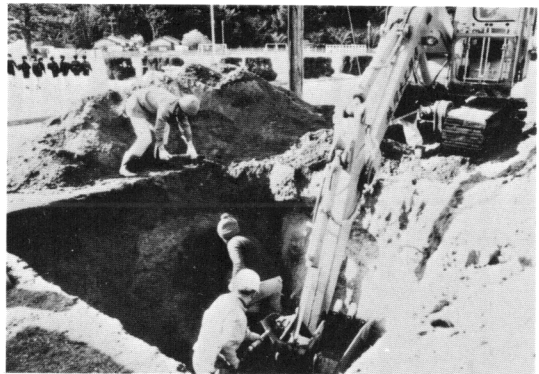
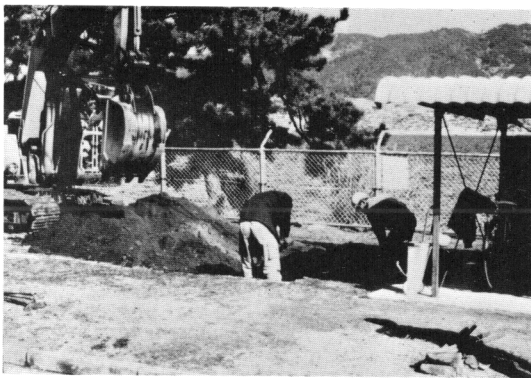
(1) Aトレンチ南壁土層断面



(2) Aトレンチ西壁土層断面



(1) Cトレンチ南壁土層断面 (石垣状遺構)



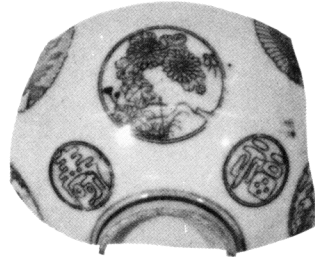
(2) 調査風景



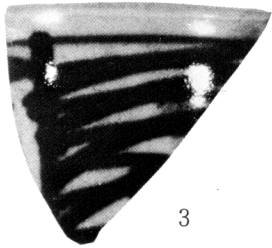
1



2



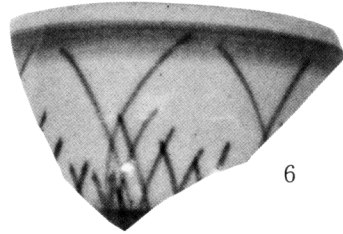
4



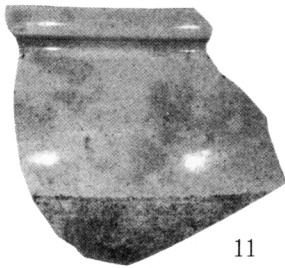
3



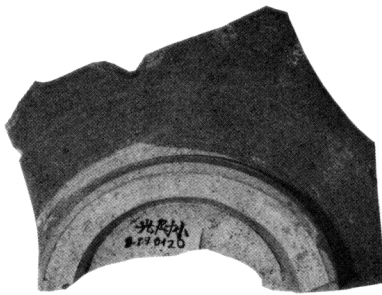
5



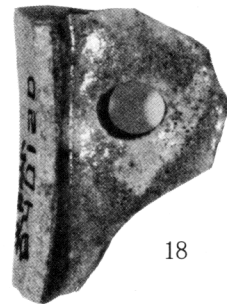
6



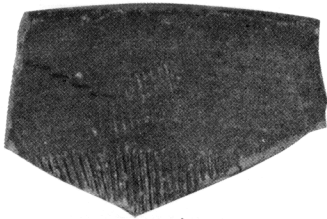
11



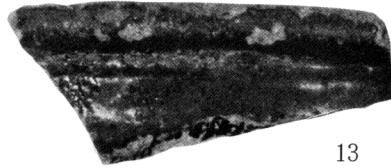
12



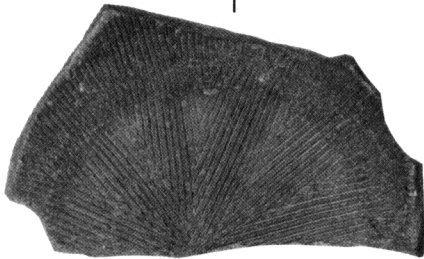
18



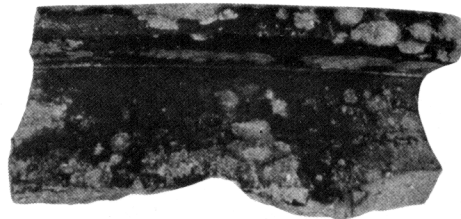
19



13

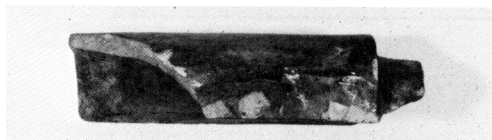
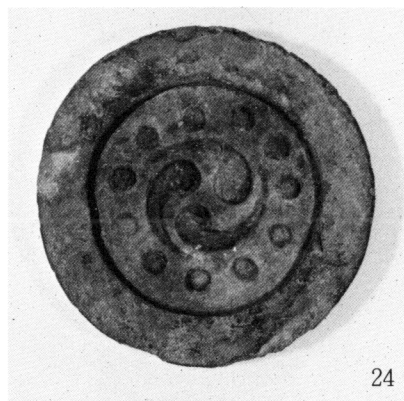
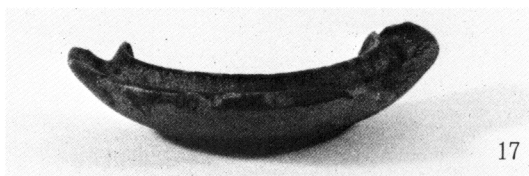
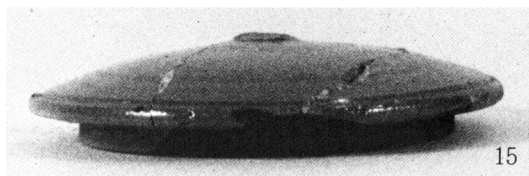


20



21

出土遺物 (磁器 1~6, 陶器11~13・18・20, 瓦質土器21)



出土遺物 (磁器 7, 陶器 9・14・15・17・19, 瓦 22・24・25)